The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂関係研究文献提要（六）
Author(s)	
Citation	懐徳. 1988, 57, p. 130-136
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90702
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

古林ゟ　同壱人
帳場前ニ記ス
応接人前ニ記ス
幷河ゟ　出入之者壱人四日ゟ七日迄

一包金之事
六日升平店ニ而諸包金相願整来ル

一革島新五郎名代事
太田新之丞出阪可有之別ニ不設置処新之丞出阪之上禁中御用ニ付火搆候由ニ而急ニ代人相頼候へ共其備なく相済候

一京都幷河父子代人之事
相頼候へ共臨喪之節故此義なし

一早野之事
死者格別之懇意故行列ニよさし候へ共棺脇ニ引傍ひ被参候様相頼

一焼香列読出し
田辺屋仁右衛門相頼

〈懐徳堂関係研究文献提要(六)〉

(16)論文：時野谷　勝「懐徳堂の歴史観」（『季刊日本思想史』第二十号、昭和58年）

本論文は、懐徳堂の中興期を代表する中井竹山・履軒の著述を通して懐徳堂の歴史観の特色を考察している。

一、中井竹山の『逸史』

寛政四年（一七九二）の船場・天満の大火による懐徳堂類焼から寛政八年（一七九六）の懐徳堂再興工事竣工までの間、竹山は幕府要路に対して再興の援助を積極的に働きかけている。その二年後の寛政十年（一七九八）に、竹山が既に成稿していた『逸史』を献納せよとの幕府の命が下った。それ以後、寛政十一年五月二十八日に『逸史』を献納するまでの経緯は、竹山の「自序」に明らかであるが、同書中の「進逸史牋」には、「自序」からは看取し得ない『逸史』編述の目的をうかがうことができる。

「自序」によれば、起稿以来五回の推敲を重ね、天明年間（一七八一～一七八八）ようやく完稿し秘蔵していたところ、図らずも将軍家に聞え、寛政十年十一月に献納の命が下ったため、急ぎ繕写に努め、寛政十一年四月にそれを終え、五月二十八日献納の運びになったという。しかし、「進逸史牋」には、「英主」の「英」の字が、後桃園天皇（在位、明和七年～安永八年）の諱を避けて「英」と闕筆で記されている。とすれば、『逸史』は、幕府が献納の命を下す以前、明和七年（一七七

〇）～安永八年（一七七九）の頃に既に完成していたことになる。すなわち、竹山は、以前から幕府か朝廷に献納する目的で『逸史』を編述していたのであろう。

また、当時の泰平の基礎を築いた家康の事蹟を顕彰し、正しく歴史を理解させるために、竹山は『逸史』十三巻を著したのであると考える。なぜなら、『逸史』の記述において、家康に対して慇懃な表記をとる一方、秀頼に対しては軽蔑的な語を用いているからである。『逸史』には、単純な年代誤記が八ケ所もあり、決して優秀かつ公正な歴史叙述とは言えないが、かえって、それは『逸史』の編述の意図を反映していると言えよう。

『逸史』はその推敲の過程で、名分論の立場から、用語について多くの批判を受けている。そこからは逆に、当時の儒者の形式主義的名分論を退けて、封建社会の泰平という現実に目を向けた、竹山の現実肯定の立場をうかがうことができる。もちろん、竹山は無批判に幕府の政治に迎合したわけではない。『草茅危言』中には政治・経済・社会の各分野に渉って忌憚のない批判や献策が見られ、竹山には現実に対する批判の目もあったと言えるからである。

二、中井履軒の『通語』

『通語』十巻に「野史氏曰」として示された履軒の評語を要すれば、履軒は「国を統治しようとするものは、人間性を尊重し、人情を重んじなければならない」という歴史観を持っていたと言える。

さて、『通書』は、後に彰考館総裁として『大日本史』編纂に主導的役割を果たした栗山潜峰の『保建大記』の所論に対抗して著わされている。とすれば、栗山潜峰、さらには懐徳堂初代学主三宅石庵の弟で、歴史観において潜峰と対立した三宅観瀾に注目する必要がある。栗山潜峰の『保建大記』の特色は、皇位継承の正統性を三種の神器の所在に求める神器正統論にある。一方、三宅観瀾は「（皇位継承の）正統は義にありて器にあらず」とする大義正統論を主張し、神器の存否のような形式論ではなく現実の人間としての徳行を重視している。この観瀾の歴史観は、兄石庵の講学の態度（観念的ではなく現実の生活に即していた）と無関係ではない。観瀾の『中興鑑言』中には、京坂地方の旺盛な経済活動の雰囲気を体験する機会に恵まれたからこそ確立し得た歴史観を見出すことができる。

このような観瀾の歴史観は、履軒の『通語』に一層鮮明に表明されている。すなわち、『通語』は、時の政治が人心を得ているか否かによって歴史が決定されるという歴史観に貫かれている。それは、観念的な大義名分論ではなく歴史の現実に基づくもので、大坂の町人生活に根差した履軒の現実的解釈を示している。

また、『弊帚』中の「義貞論」と「甲越論」は、履軒の歴史観を考察する際に重要である。前者では新田義貞・足利尊氏に対する、後者では武田信玄・上杉謙信に対する世間の評価を、体面とか名分などよりも、実際の成果を重んずる現実的な庶民感覚を判断の基準に再検討している。

さらに履軒は、『弁妄』中で、『日本書紀』に記された反乱・皇位簒奪等の権力闘争の事実を根拠に、中国の影響を受ける以

前の日本では大御教が行われ、自らよく治まっていたとする国学者の古代史観を、彼らの作りあげた虚構だと痛論している。また、日本を神国とする神道家・国学者の国家観に対しても、それはどの民族にもある神話を堅持したために形成された国家観に過ぎないと批判している。このような履軒の批判からも、一層明白に歴史の現実を直視する態度を見出せる。

履軒の経済・社会関係の論策からも、彼が経世済民に思いを致しており、しかもその方策が大坂の生活に根差した具体的な体験と見聞とに裏づけられていたことがうかがえる。

以上のように、竹山・履軒の著述に見られる歴史観は、大坂の現実の庶民生活に裏づけられたものであったと言える。

（矢羽野　隆男）

(17)論文：脇田　修「町人学問所としての『公』」

（『季刊日本思想史』第二十号、昭和58年）

本論文は、町人の学問所としての懐徳堂の性格を、三宅石庵と中井竹山との学風や社会意識の相違という観点から、歴史的に考察している。

一、成立の歴史的背景

周知のように、懐徳堂は享保九年（一七二四）に設立されたが、その設立の背景には元禄末年以降の社会経済的な事情があった。すなわち、幕府経済政策の変化による経済界の不安、淀屋の欠所・銀座の処罰などによる町人社会の衝撃、さらには商品経済の発展による階層序列の変動などである。こうした危機感を背景に、幕府の享保の改革にも触発されて、懐徳堂は設立されたと言えよう。これらの事情は、大阪周辺の町場である平野郷の含翠堂の設立事情と比較考察することによって明らかとなる。

もっとも、この両者は同様の社会情況の中で生まれながらも、実際の活動については相違があった。含翠堂が一村一市としての民衆の教化を意図したのに対して、懐徳堂は上層町人の家の存続を重要課題としたのである。

二、学問と経営

平野含翠堂の創設に尽力した三輪執斎の『含翠堂記』によると、含翠堂における学問は、日常生活を規定する道徳を学ぶことが中心であり、教説の異同を問うことは必要でないという。そして、懐徳堂学主である三宅石庵の学風も、この執斎の考え方に近かった。石庵は、異なる学説があったとしても、それぞれの説が並び行われることによって、天下の公たる学問は発展してゆくと主張している。

しかし、それは石庵が天下の公たる学問を志すことによって、直接幕府と結びつき官許を得ようと考えていたことを意味するものではない。事実、官許については、石庵ではなく中井甃庵が学問所の願出を行っているのである。石庵には執斎や中井甃庵・竹山父子のように幕府と結びついた学問を求める意志はなく、各々が学問を修めることによって、理想的な世界を作り生計をたてようと考えていたのである。それはもちろん、幕藩制支配と現に露呈している社会矛盾とを解決しようとするものであったが、社会的実践性には乏しかった。ただし、それは被治者的世界に立脚しているという点において、大阪の町人社

会に適合した学風であったと言えよう。

石庵の学風は懐徳堂の経営とも一定の関係を持っている。懐徳堂は町人五同志を中心に経営管理されており、学主といえども身分は客分であった。このような初期懐徳堂のあり方は、従来教化機関の特色と考えられてきたが、教官の側すなわち甕庵と竹山にとっては、必ずしも満足すべき情況ではなかった。石庵が客分に安住していたのは、石庵の公の観念からすれば当然である。公学を興すにあたって町人が努力することは公であり、経営を同志に任せることも公学に努めることと考えたからである。しかし、竹山は儒者を町人とは別の独自の身分にしようとした人物、しかも支配身分に位置づけようとした人物であった。両者の相違は明らかであろう。

三、公儀免許の意義

中村良斎の『定約』によると、懐徳堂においては、学問所を君主として、学主以下がそれぞれの役割に応じて仕えることが公であるという。そして、このように公が公儀免許にあるとする良斎の考え方は、石庵の考え方と明らかに異なっている。学問所を君主、学主以下をその臣下とみるような考え方には身分意識が反映されており、ここでの学生の位置づけも石庵よりは竹山に近い。

つまり、懐徳堂の存在は、天下の学における公から公儀に権威づけられた公的存在へと変化したのであり、それと共に懐徳堂は、大阪町人が自ら学ぶ学問所としての性格から公儀御用の名のもとに町人を教化する学校としての性格に転じたのであった。

竹山が懐徳堂を町中から離すことを求めたことも、懐徳堂が公儀の役を勤めるものと考えていたためである。たとえば、当時、大阪町内で捨子があるとその子を養育しなければならないという規定があったが、竹山は、懐徳堂が町内の諸役御免であることを理由に養育を拒絶している。

また、竹山は、儒者は町内に存住しながら公儀の役を勤める者であるという独特の身分論を展開して、町役の勤めをも拒絶している。竹山にとって、懐徳堂は確かに町人のための学問所ではあったが、それは決して町人身分による学問所ではなく、町人よりも一段上の儒者が町人を教化するための学問所であった。

以上のように、町人学問所としての懐徳堂は、公の観念について言えば、天下の公たる学問を修めるという意味での公から、公儀免許によって権威づけられたという意味での公へと変容している。

（藤居　岳人）

(18)論文：梅溪　昇「懐徳堂と西村時彦（天囚）」（『季刊日本思想史』第二十号、昭和58年）

本論文は、明治末年から大正初年にかけての懐徳堂再興事業の中心人物である西村時彦が、どのようにして、またなぜ、そうした役割を果たし得たかについて述べている。

一、まえがき―懐徳堂の再興事情―

かつては江戸の昌平黌と並び称された懐徳堂も幕末には堂勢振わず、明治二年ついに廃絶した。中井家に生まれて十五年目に堂の廃滅を経験した中井木菟麻呂は早くから再興の希望を抱

いていた。

中井甃庵の満百五十年、竹山の百年、蕉園の百五年にあたる明治四十一年、木菟麻呂は、再興ならずともせめて先賢の祭典を行いたいという旨を重野安繹博士に伝えた。重野博士はそこで木菟麻呂に朝日新聞社の西村時彦を紹介した。西村は協力を約束し、明治四十二年九月二日、大阪文化の研究を目標に大阪人文会を創立した。

同会において天囚らは、祭典の開催と懐徳堂記念会の創立について協議、決定し、同会は懐徳堂記念会へと発展解消する。このようにして、明治四十四年十月五日ついに祭典が挙行された。さらに、大正四年には府立大阪博物場の西北隅に講堂用地を提供され、翌五年に講堂の完成を見、ここに懐徳堂の再建が成ったのである。

二、天囚の漢学再興への関心とその展開

天囚（西村時彦）は、慶応元年（一八六五）七月二十三日、種子島西之表に生まれた。幼年の頃から儒学的気風の中で育った天囚は、早くから秀れた文才を示した。

明治十三年十六歳のとき上京し、父の友人重野安繹の家に寄寓する。明治十六年、東京大学文学部古典講習科の官費生となったが、ここでも彼の才能は群を抜いていたという。

しかし、下宿でひとり住まいを始めてから、大酒癖が抬頭し、放蕩時代が始まる。明治二十年官費制度の廃止によって古典講習科を中途退学するが、同年、諷刺小説『屑屋の籠』を発表して、漢学を廃せんとする風潮に反対を唱えている。さらに二十二年には、『活髑髏』『奴隷世界』を発表し、皮相な欧化主義に反対し、国粋主義を説いた。

明治二十二年六月、天囚は「大阪公論」を振り出しに新聞人となり、翌二十三年五月には大阪朝日に入社する。そして二十六年、議会における政府、民党の紛糾を憤って『大衝突論』を出版し、儒教道徳の回復を唱えた。これ以降、彼は文芸物から遠ざかり、時文、社説に筆陣を張るようになる。折しも、大阪朝日には、高橋健三が入社して、伝統主義を主張し、条約改正問題に対外硬を説いて大いに国民意識の発揚につとめていた。

三、清国行の体験と天囚の漢学復興運動

天囚の第一回清国行は、明治三十年十二月、三十三歳のときで、翌年二月に帰国した。その後、三十三年と三十四年の二回、南京に留学している。第一回清国行では、排日の主導者の張之洞を日清親善を目的として説得し、㈠視察員派遣㈡日本への留学生派遣㈢日本人招聘の三条件を受諾させることに成功している。

清国の植民地化をまのあたりにした天囚は、清国衰退の要因に教育の荒廃を見、中国留学生の受け入れと清国への教育者の派遣をわが国の使命とした。その教育のあり方について、彼は渡清教育家に、新旧二学（西学と儒学）倶に偏廃すべきでなく両者の調和に留意するよう希望している。

一方、国内では、明治三十二年、樺山資紀文相に対し、「上文部大臣請復興昌平学書」を送り、漢学復興のために昌平黌を復興させることを希望している。彼のこの教育勅語尊奉の立場は晩年に至るまで変わらなかった。

日露戦争後、天囚は、政論から遠ざかり、取材活動をわが国

儒学史にしぼり、学者として国民教化を目指すことになる。

四、明治末期の天囚の思想と懐徳堂研究

天囚は明治三十九年の四国旅行「南国記」の連載から、近世学問史の研究を次々と紙上に発表していった。それらのうち「宋学の首唱」という連載を基礎に、明治四十二年九月『日本宋学史』が出版された。その叙論で明らかにしているように、天囚の研究目的は国民性の涵養にあった。天囚にとっては、わが国「固有の道徳と一致した所の儒学を興したいと云ふのが本意」だったのである。

このような天囚が、大阪の学問、特に懐徳堂に興味を抱いたのは当然であり、明治四十年頃には、中井竹山らを中心とする大阪の儒学史についての研究計画があったと思われる。

明治四十一年に重野安繹が、中井木菟麻呂に対して、懐徳堂復興について天囚を推したのは、そうした事情に基づくのである。

天囚は、明治四十三年から、紙上に「懐徳堂研究」を発表、上下あわせて八十四回に及んだ。天囚のこの研究は、没後、懐徳堂記念会から*『懐徳堂考』（大正十四年十一月）として発行された。これを見ると、懐徳堂の精神を大阪人に再認識させ、これを必ず再興し、もって世道人心の荒廃を防ごうとする彼の深慮をうかがうことができる。

五、むすび

以上明らかにしたように、天囚にとって懐徳堂の再興は、素志であった儒学の復興、国民意識の発揚の実現であった。彼は、懐徳堂は大阪の文科大学であり、大阪に文学部ができたときは、それに合流すべきだと考えていた。

天囚は大正十三年七月に死去したが、この考えは受け継がれ、戦後、大阪大学に文学部が増設された際、蔵書三万数千余冊が大阪大学に寄附されて懐徳堂文庫となり、大阪大学は懐徳堂の事業を共に継承することになった。（湯城　吉信）

*同書は、一九八四年、「懐徳堂・友の会」によって複刻された。

紹介

大月　明著『近世日本の儒学と洋学』

大月明さんの遺著となった書物が、このほど刊行されました。大月さんは大阪市立大学文学部教授で、日本近世思想史を専攻され、懐徳堂などの研究において、すぐれた成果をあげられた方ですが、昨年六十三歳でなくなられました。今回、同僚らのお世話で、その研究が一冊にまとめられました。

本書の内容は、第一部　懐徳堂をめぐる思想家たち、第二部　渡辺崋山と洋学思想、第三部　水戸学と尊王攘夷思想、第四部　変革期における儒学思想―阪谷素の場合、となっています。

このように本書は、広く近世の儒学と洋学について、多くの思想家をとりあげておられますが、学風は実証的で厳密なもので、戦後、このような分野の研究がほとんどなされなかった時期から、先駆的な仕事をなされたということができます。とくに懐徳堂については早くから懐徳堂友会の会員であり、講演などに御協力を頂きましたが、本書の第一部には五井持軒・蘭洲、三宅石庵、中井甃庵・竹山、富永仲基がとりあげられており、本人の著述はもちろんですが、交友関係や同時代人の批評などを紹介されながら、その人物と思想を明らかにされています。これらの論文は懐徳堂研究の基本的な文献ということができます。また洋学では崋山の他、平賀源内、水戸学では三宅観瀾と栗山潜峰、藤田幽谷・谷三山を含み、文明開化期の儒者として朗廬阪谷素のことが記されています。なかでも阪谷についての論文は雄篇で、明六社・洋々社の同人として活躍した阪谷についてのもっともまとまった研究であります。ちなみに大阪大学医学部の前庭にあるオランダ人医師エルメレンスの記念碑の文は、彼の手になります。

このように本書は懐徳堂を含む近世中後期の思想研究にとっての重要な文献です。一読をお勧めします。

（脇田　修）

（思文閣出版、一九八八年九月刊、A五版三四九ページ、定価八五〇〇円）